令和５年度　朝来市立朝来中学校　学校評価

学校教育目標

郷土を愛し、自ら学ぶ心豊かな生徒の育成

総合的な学校関係者評価

○学校運営、教育課題、課題教育において概ね達成に近いと思われる。
○授業参観や学校行事に参加した際には、多くの生徒が笑顔で教育活動に取り組んでいた。
○場面緘黙の生徒にはホワイトボードでの筆談や教室に入りずらい生徒には別室での学習支援、外国語籍生徒の日本語指導など支援が必要な生徒一人一人に寄り添いながら対応されており、校内の指導体制の充実を感じることができた。保護者のアンケート結果からも学校への期待の高さがうかがえた。
○今後は、学校での学習に加え、地域との交流をさらに充実させ、様々な体験を通して郷土愛あふれる生徒の育成に努めて頂きたい。

自己評価　　**達成状況（Ａ：達成している　Ｂ：概ね達成している　Ｃ：あまり達成していない　Ｄ：達成していない）**

	評価の観点		達成状況	学校の取組状況・今後改善すべきこと	自己評価の妥当性 （評価項目ごとの学校関係者評価・意見等）
学校運営	地域とともにある学校づくり	家庭や地域の人々への情報発信	B	学校・学年・学級便りの定期的な発行や「さくら連絡網」により、リアルタイムな情報の発信に努めた。今後は、双方向による情報の共有化と、デジタル化の推進が必要である。	さくら連絡網により、修学旅行の様子や気象警報発令による下校案内などがリアルタイムで学校から発信され、学校の様子が良く分かった。紙面配布を削減し、簡易なアンケートなどはWeb上で行うなど業務改善も進められている。
		学校運営協議会活動の充実	A	定例会だけでなく、合唱コンクールの審査や進路面接官など教職員と違った視点で生徒に直接助言等頂くことができた。今後はPTAなど他団体との連携を見据えた計画立案が必要である。	教職員やＰＴＡなどそれぞれの立場で、生徒が充実した学校生活が送れるように意見交換する場があればさらに良いと感じる。学校運営委員においても多様な人選を行うことで活性化が図られると考えられる。
	生徒指導	豊かな集団生活が営まれる学級づくり	A	生徒会役員を中心に、生徒主体の様々な活動を実施し、教職員のアイデアも融合させた掲示物などを掲示することで、学級や学年に一体感が醸成された。	生徒一人一人が主体となり、体育祭や文化祭などの行事が行われていると感じた。行事を通して生徒が充実した学校生活の基盤を築いているだけでなく、社会集団にふさわしい人間形成が図られていると感じた。
		児童生徒の内面理解を図る指導の工夫	B	教職員が生徒の様子を毎日データ入力し、教職員間で情報の共有が図られた。教育相談を実施し、生徒に寄り添い、傾聴の姿勢を基本として対応しているが、信頼を築ききれない生徒もいる。	多様な価値観を認める社会背景の中で、様々な価値観を持つ生徒や保護者にどのように寄り添っていくかがこれからの課題と考える。教職員の負担が大きくなる部分でもあり懸念している。心理等の専門的なSCやSSWなどの積極的活用をさらに推進していく必要がある。
		いじめ、不登校、問題行動、ネットトラブル等への適切な対応	A	問題行動の未然防止に努め、生徒の先回りをした指導を年間通して行うことができた。一方で不登校や別室で生活する生徒などへ、きめ細かに対応してきたが、依然として不登校生徒の出現に歯止めがかからない。	集団の中で、人格形成を図ることが大切と考えられる。不登校やいじめの原因が多岐にわたっていることから、保護者や家族に協力を求め、これまで以上に保護者との連携強化が必要と感じる。
	危機管理体制の整備	マニュアルの点検・見直し	B	年度当初に危機管理マニュアル等について全職員で確認できた。一方で、地震・火災・土砂・不審者など多岐に渡るためマニュアルの確認点検だけでなく、計画的な実施訓練や研修を行っていく必要がある。	定期的な訓練は今後も必ず実施して頂きたい。昨今の自然災害の突発性や甚大性から、マニュアルの見直しにおいては、年度当初だけでなく年度途中であっても機会を見つけて改訂していく必要を感じる。
		地域課題に応じた防災、防犯教育の実施	A	本年度は避難訓練を３回実施した。防火シャッターを使った訓練や放送が使えない状況での訓練など実際の災害を想定した訓練を実施することで、新たな課題等についても教職員で共通認識を図ることができた。	新しく設置された防火シャッターを活用した訓練や災害時に電力が使用できない状況を想定した訓練が実施できている。生徒には「自分の命は自分で守る」ことを徹底させ、今後も様々な災害を想定した訓練を確実に実施頂きたい。
	特別支援教育	インクｰルーシブ教育の推進、校内の指導体制、個に応じた指導	B	定期的な校内支援委員会を実施し、課題や指導について共有することができた。一方で支援を要する生徒が多く、支援体制の限界に来ている。市適応教室「すまいる」など他機関の有効な利用について、より積極的に進めて行く必要がある。	教職員の共通理解を図りながら、個に応じた対応が実践されている。一方で教職員の負担も大きくなるため、インクルーシブ教育を実践しやすい環境整備や専門性の高い人材の派遣等について、自治体の支援が必要と感じる。
	安全安心に過ごすことができる学校づくり	新型コロナウイルス感染症対策	B	教職員からだけでなく、保健委員会の生徒も手洗いやうがいの呼びかけ、加湿器の稼働など感染対策を自治的に行うことができた。一方で、コロナ感染への不安がまだ高く、マスクを外せない生徒も多くいる。	手洗いやうがいといった基本的な感染対策を今後も励行し、感染対策に努めて頂きたい。コロナ禍で得た経験を活かしながら、効果的な教育活動の実践に努めて頂きたい。
	あさごドリームアップ事業	特色ある学校づくり	B	鉱石の道体験など新たな取り組みに着手し、生徒のふるさと学習に繋がっている。ソーラン節指導や赤ちゃん先生、人権講演会など様々な活動を行っているが、これらの事業があさごドリームアップで実施されている点について、教職員への周知が必要である。	地域と連携した体験事業は、地域の歴史を知り、未来につながる大切な学習となるため今後も継続して頂きたい。一方で教育はシンプルで地道な活動の積み重ねでもある。体験と地道な活動をバランスよく取り入れ生徒を育んで頂きたい。
教育課程	自ら学び自ら考える力の育成	主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業づくりのＵＤ化推進	B	授業の流れや授業のめあての掲示など共通して実践できている。一方で主体的・対話的で深い学びの支店に立った授業づくりまでには至っていない。授業づくりのUD化に向けた教職員の研修が不可欠である。	学力差や様々な背景を持つ生徒一人一人に向けての授業づくりは時間もかかるが、先生方に期待している。先生方が授業に集中でき、研修や研究が実践できる環境整備を保護者、地域、自治体など様々な立場にも支援頂けるよう発信していきたい。
	基礎・基本の定着と個に応じた学習指導の充実	指導内容・指導方法の工夫改善、評価方法の創意工夫	B	毎日のステップアップの取り組みや同室複数指導を行うことで、基礎基本の定着に一定の効果があった。一方で、学習への抵抗感が強い生徒の増加や学習を妨げる要因の複雑化が進んでおり、対応に苦慮する場面が増えている。	同室複数指導などにより、基礎基本の定着が図られ、取り残される生徒が少なくなるのは良い取組だと感じる。しかしながら限界もあると感じる。楽しく学べる雰囲気の醸成や生徒が互いに教え合える関係性を今後も培って頂きたい。
	道徳教育	授業研究の充実と指導の工夫	B	道徳の研究授業を実施し、教職員で研究協議することができた。校区の小学校や市内の中学校で実施されている道徳の研究授業への参加を増やすことや参加者から情報提供を受けるなど有効な研修に繋げていきたい。	研究授業を実践することや参観することで、先生同士がさまざまな意見を交流され、先生方自身が成長される良い機会になると感じる。
	情報教育	情報活用能力の育成に向けた指導改善	B	積極的にICTを活用する土壌が確立されている。オンライン授業も定期的に実施し、いつでも、どこでも学べる環境の整備に務めている。大型提示装置転送の不備や生徒用タブレットの修理交渉、ICTに関する調査など煩雑さも増加しており改善したい。	オンライン授業がスムーズに行えると不登校生徒や欠席した生徒も学ぶ機会が増えると想像する。一方でパソコンの修繕やICT環境の不具合等で先生方の負担が大きいと聞く。専門の職員配置を要望していきたい。
課題教育	人権教育	人権尊重の精神の育成	B	地区巡回学習や人権講演会への参加など、人権に関わる取り組みを年間通して実施できた。人権集会では生徒の意見発表を取り入れるなど人権を自分事として考える機会を設けた。LGBTなど新たな人権課題の出現に対応できる教職員の研修が必要である。	世界から称賛される日本の道徳性は学校教育によるところが大きいと感じます。身近で起こった事例などを題材にすることで、さらに人権感覚が磨かれ、自分の思いや相手の思いを大切にできる生徒の育成を図って頂きたい。
	体験活動の充実	自然学校、トライやる・ウィーク等を含めた体験活動の充実	A	学校行事や体験活動を行う中で、事前事後においても生徒が主体的に取り組める学習を行い、行事の目的や狙いが達成できた。また、その成果を全校集会で発表したり、小学生に発表することで、より一層生徒の達成感や自信へ繋げることができた。	体育祭や文化祭などの学校行事では、生徒が主体となり生き生きと活動する姿を目の当たりにし、見ている方も元気になれた。「トライやる・ウィーク」では地域社会との繋がりが生まれ、よい経験ができていると感じる。
	食育の推進	栄養教諭と連携した食育の推進	B	給食委員会が中心となり、はばたん給食や給食週間を利用し、全校生徒で食育について考え、体験する機会を設けた。一方で、給食の残菜が多い課題がある。保護者や地域を巻き込んで食育に取り組み、残菜の減少に努めたい。	しっかり食して大いに動く。「食」は生きる上で基本となる大切な部分である。学校での取組は副次的であり、家庭で本来行うべき内容と考える。学校と家庭が連携し、より良い食育環境が整うことを期待しています。
	キャリア教育	進路選択能力の育成・社会的自立に必要な態度や能力の育成	B	行事がある度にキャリアノートを記入し、自身の成長を確認する機会を必ず設けた。キャリア・パスポートの小学校からの引継ぎや高校への引き渡しも確実に行えている。学活を要としたキャリア教育の実践が不十分のため、職員研修が必要である。	キャリアノートやキャリアパスポートで自分自身を振り返り、自分の成長を実感できることは自己肯定感にも繋がり大切な視点であると感じる。小中の連携をさらに強化され、９年間を通したキャリア教育が実践されることを期待しています。
その他	・読書活動推進事業の充実を図る。		A	事業１年目であるが、読み聞かせ活動やあさご森の図書館の積極的利用などを行う中で、確実に読書する生徒が増えている。２年目は、より具体的に事業計画の立案を行うことで、さらに読書に親しむ児童生徒の増加を目指したい。	読書でしか得られない世界観や価値観に出会うことは、生徒の人間形成に大きな影響を与えると考える。大人自身も読書する機会が減ってきているように感じる中で、保護者や地域を巻き込んだ読書活動を推進して頂きたい。